熊毛地区社会教育委員だより

平成28年2月発行
熊毛地区社会教育委員連絡協議会

生涯スポーツと地域交流

熊毛地区社会教育委員連絡協議会
会長　山元　兼夫

私は若い頃からスポーツに親しみ、特にソフトボールを愛好していました。その関係から多くの方たちと知り合い、スポーツ以外の交流もできました。

私が還暦を過ぎたころ、ソフトボール仲間と集まり、種子島シニアソフトボールクラブ「ブルーロケッツ」を立ち上げ、各種大会・イベント等に参加するようになりました。また、ソフトボール大会や研修会等の誘致も手がけ、平成二十八年度は「九州シニアソフトボール種子島大会」と「鹿児島県ソフトボール協会研修会種子島会場」の開催が決定しているところです。二つの事業で五百人を超える選手・役員の来島が見込まれ、地域活性化と参加者の交流と高揚に役立つと考えております。

どの地域も少子高齢化でイベント等の開催が大変苦慮されている中、私たちが「今できること」をしようとクラブ全員の気運が高まり、活動の一環として国道・県道の空き地を利用した花壇つくり運動のボランティアを展開しています。このことが県の「ふるさとの道サポーター」の指定を受け、月二回クラブ全員で作業を行ったり、情報交換をしたり充実した活動ができていると自己満足をしているところです。

現在クラブ員二十人で運営していますが、高齢化が進む状況の中、今後の課題としましては、幼児から高齢者まで世代を超えた生涯スポーツの交流や大会を模索しています。

地域のスポーツ団体、育成会、老人会等の協力を仰ぎながら企画したいと考えております。「今できること」を合い言葉にこれからも部員全員参加で頑張っていきたいと思います。

ハイシニアソフトボール徳島大会にて

地域ぐるみで育む子ども会活動

中種子町子ども会育成連絡協議会
会長　徳永　眞一

核家族化、少子化そして過疎化が進行する中にあって、標記の事はなかなか難しい課題であります。

時代錯誤かも知れませんが、自分達の頃は地域の方から叱られるのが日常茶飯事でした。今はどうかと言えば、なかなかこのような光景を目の当たりにするのは皆無に等しいです。他人の子どもも我が子同然にほめてあげたり、叱ったりする機会がないというか、その行動に移さないことが寂しいです。

また、家庭内においても、子どもが良い事をしたら、大げさでも良いので、目いっぱいほめてあげる。また、逆に悪いことをしたら、躊躇なく叱る。これが本当の我が子に対する愛情の証であると思います。

子どもを過保護に育てたり、甘やかしたりしたそのつけは、将来保護者自身に降りかかってくると言っても過言ではありません。

子どもの自殺、子が親へ、あるいは親が子への死傷事件が後をたたないのをマスコミ等で見聞きする時、心がもぎ取られる思いでいっぱいです。

親子の愛情、絆、そして家族とは何かを今一度見つめ直してみる必要があります。

地域においても当初申し上げましたが、周囲

いかだ遊びの様子

に住んでいる方々が全体であたたかい気持ちで見守って、支え合っていかねばなりません。おかげ様で本町内の子ども会育成活動も積極的に執り行われているところです。

高校生クラブ「べにんこ」の参加協力も頂き励みとなっています。

これからも地域が一体となり、かわいい子どもたちの活動をあたたかい目差しで見守っていきたいものです。

心にふるさとを

南種子町社会教育委員　西村　真

昨年は本県で国民文化祭が開催され、本町でもその一事業として「種子島歌い継がれた民謡と踊りの祭典」が行われた。小学校区ごとで披露された民謡や踊り等には小・中学生を中心に据えたものが多く、かわいらしさとともに地域の伝統文化が引き継がれていく嬉しさを実感することができた。

町民大運動会での集団演技

少年期に体験したことは、人格形成に大きな役割を果たすと考えている。見たり、聞いたり、感じたりしたことは生涯それぞれの心に残って「郷土愛」とか「家族愛」とかの基礎となるのではないだろうか。

十数年前、県内に九十六の市町村があった頃、各市町村に「〇〇っ子育成プラン(〇〇は自治体名)」と称して、少年たちに各地域でしかできない体験をさせようという取組があった。本町であれば、広田遺跡ミュージアムや宇宙センターの施設を見学するとか、黒糖作りをするというような具体的な例が示されていて体験を推奨するものであった。それは時代とともに薄れつつある郷土色を伝える良い実践だと思う。郷土学習というと口はばったいが、子どもたちに故郷となるこの地で、より多くの体験を多くの人々とともにしてほしいと願っている。

本年度の町民大運動会では町公民館婦人部連の方々とともに本校（南種子中学校）生徒が集団演技を披露する機会を与えてもらった。観客の笑顔とともに子どもたちの心にも故郷で地域の人々と一緒に舞った体験は残っていくことだろう。民謡や踊りなどの文化とともに、体験も次代に継がれてほしいと願う。

青少年育成のための地域探訪活動

南種子町社会教育委員　宮里　照夫

時間がもっとゆっくりと流れていた時代は、地域内の情報は親から子へと受け継がれてきた。たとえば「松ヶ下の川底は見た目より深いので泳ぐな」とか「松原の崩れは流れが速いから溺れて亡くなった人がいるぞ」など、子どもたちに具体的な字地名で危険回避情報を教えていた。

そして当時の子どもたちは、地域内の情報を字地名で俯瞰的に把握し、放課後や休日の遊びの中で互いに拡め合った。また親も地域住民も子どもたちの行動範囲が土地勘により確実に把握できていた。子どもの世界では「大門の崖下には《コッポー=小粒の自生するキウイフルーツに似た果物》があるんだよ」とか、それぞれが得意げに話す材料を持っていた。日々の生活の中で地域の情報・知識は育ち蓄えられ、地域の中で吹く風、風土となった。

地域探訪活動の様子

今、子どもたちの遊びを含む全ての行動は時間的に少なく、細切れでせわしいと感じる。休日はスポーツ少年団大会や習い事、塾通いで大人並みの生活リズムとなっている。その合間を縫って、私たち大人が地域のよさや名所旧跡について子どもたちに教え、受け継いでもらうことが主流となっている。

地域の文化や歴史は日頃の生活の中で学べた時代から、大人が企画立案して子どもたちの生活に密着してはいないが「情報・知識の中での地域のよさ」として受け継がせるための取組を、毎年の地域行事を通した青少年育成活動として実施している。

特設しなければ語り継ぐことの機会がなくなった今だからこそ、地域愛が芽生える青少年育成のための地域探訪活動は重要である。

そして今後は限られた日程の中で、子どもたちが直接体験する場を増やしていくことが望まれる。

地域と老人クラブ

屋久島町社会教育委員　岩川　宏

屋久島町老人クラブの一員として、また社会教育委員として与えられた任務をどのような形で取り組み成果が得られるのか、二年間の任期の中で達成感が湧かないまま終わろうとしています。

そして社会教育委員の役割とは何かを模索する中で、高齢者に関わる役割の大切さや重要なことが数多くあることに驚いています。

身近な変化が見られたことの一つが、あいさつの大切さです。当初、街頭で高齢者と子どもたちが互いに声をかけ合うことに戸惑い、もどかしい様子でしたが、続けるうちに距離感が縮まり、喜びを感じている様子が見受けられるようになりました。それを糧に健康寿命を延ばせているように思っています。最近では子どもたちが進んで声をかけてくれるようになり、あいさつという小さな行いが、青少年の健全育成につながり、高齢者にとっては何よりの楽しみとなっています。

人と人の繋がりは互いの会話により生まれ、年齢層の厚い老人クラブの中では、地域との繋がりの大切さ、互いの身を案じる優しさを感じる一方で、屋久島の魅力にひかれ移住して来た高齢者との繋がりが新たな課題となっています。このようなことを考えるとき、もっと互いの会話が生まれてくれれば解決でき繋がっていくのではないかと思います。

これからまた二年間、老人クラブ役員として一人でも多く参加できる交流の場を提供できる組織づくりを目指し、高齢者の健康寿命が少しでも延びる環境づくりに努めることも社会教育委員の任務と言えると思います。

あえて筋肉労働ボランティア

屋久島町社会教育委員　日髙　雲平

私は安房区長在任中、特に夏場の町道・生活道路・公園等の雑草繁茂が気になって仕方なかった。教育委員会主導での年一回の環境美化作業で町内一斉草払い作業が行われるが、お盆を過ぎる頃にはまた茂り始める。とにかく気になる。そこで意を決して二・三人の熟年世代に筋肉労働で汗を流すボランティアグループの立ち上げを打診してみた。意外と賛同の声が力強くあり、即結成スタートして何時の間にか十年経過して現在進行形である。前日までに電話連絡、場所と時間を決めて集合し、自分の草払機で道路脇や公園の草払いを二・三時間実施する。対価は求めない。安房区予算で五万円の助成を受けて混合油代と刈り刃購入費を賄い、年間五回程度自主的に作業しており、会員は八人程いる。

ボランティア作業有志のみなさん

社会教育委員の範疇に入るのかどうか、そのことは脇に置いて、文化的催しやスポーツ大会、講演会等が社会教育の大きな骨格であることは間違いない。時代の変遷は、ともすれば老若男女ともに「公徳心」的な心遣いが薄れてきている傾向は否めない。難儀事（道路・公園等の草払い）は役場がやることだろう、悪気はなく、ほぼそのように思っておられる。たしかに空き缶拾いやごみ拾いはよくやっている。そこから一歩踏み込んで筋肉労働で汗をかく実践グループが出てくることを歓迎したい。

私たちのグループは、現役退職し年金生活に入っている人たちが主だ。これからの環境美化については役場任せではなく、地域住民

の主体的な実践活動が社会的要請になると思われる。

地域を支えるプロジェクトチームを結成

西之表市中割地区公民館
館長　奈尾　正友

中割校区は、他に増して過疎化や高齢化が極度に進み、十年以上休校状態にあった小学校も一昨年廃校となるなど、負の要素が多い地域です。こうした状況下で、何とか活路を見いだすべく暗中模索を繰り返し、一つの手段を取る事にしました。それは、地域を支えるプロジェクトチームの立ち上げです。このチームの最大の特徴は自主加入制であり、発起人の私から指名・依頼するのではなく、挙手による加入申請としました。募集に際し「今どき自分から手を挙げてチームに入る人がいるもんか」などの批判を受けましたが、校区人口の約二割にあたる十九人の加入があり、驚くべき結果となりました。

20数年ぶりの校区運動会

このチームは昨年五月に結成され、その後月一回ペースで会合を開き、様々な課題について発想や提案など活発な議論が展開されています。そして、根本的に地区行事を見直すなど、これまでにないユニークな行事の取組などが行われ、多くの区民に喜んでもらうことができました。

一例をあげると、二十数年ぶりに校区運動会を復活させ、高齢者や車椅子の方でも参加できる競技を取り入れました。チームメンバー一丸となり、その運営にあたるなど、高齢者への気遣いや心配りが感じられる活動が多く見られ、心強く嬉しく思うことでした。

今後も、この大きな力をお借りしながら区民自ら地域活動に参加できるような体制づくりで校区の活性化、ひいては、飛躍につなげていきたいと考えています。

青年団活動の更なる活性化について

西之表市連合青年団
団長　内田　智弘

近年、青年団員数の減少に悩んでいる市町村は少なくない。しかし、本市青年団は、県内一の団員数六十人で活動している。

なぜ団員数が多いのか？それには勧誘方法が大きなポイントと考えられる。

勧誘の際、最初は「面倒くさい」「つまらなそう」と皆後ろ向きだ。しかし、「とりあえず一年間やってみよう。やってみて面白くない時には辞めていいから」とさらに一押しし、加入してもらっている。その後活動をしていくうちに、「すごく楽しい」「友達が増えた」と青年団活動を待ち遠しく感じる団員が増えているのが現状である。

団員数が多いことは非常に嬉しいことではあるが、同時に悩みも生まれてきている。団員数が増えたことで、今までの青年団活動では行事が少なく、一つ一つの行事の規模が小さく感じている。毎年恒例のサンタクロース大作戦も、利用家庭数に対して参加団員数が多いことから、充実感・達成感が得られにくい状況も出てきている。

青年団のメインイベントは、サンタクロース大作戦とビーチバレー大会の開催であるが、春と秋にイベントがない。今後は、市民全体を巻き込んだイベントを模索し、次世代へ繋いでいくことが大きな使命であると考える。県内最大の団員数を武器に、実現に向けて尽力していきたい。

サンタクロース大作戦